

### 【13】 災害と事故に関する “法則”

災害は自然現象に起因し、事故は人間のミスやエラーに端を発し、いずれも人々や地域社会に損害を生じさせる万国共通の現象です。

それへの対応、取り組み方となるとその土地の成り立ち、環境はもちろんのことそこで生活し、社会を荷ってきた人々の考え方や行動様式、大げさに云えば文化そのものが反映されます。

下記の“法則”は防災業務に長年従事してきた筆者の自戒の意を込めた見方にすぎないので、気にされず苦笑して読んで頂ければ幸いです。

- (1) どんな大きな災害や事故でも年月の経過と共に忘れられる。  
今では広く知られている一般的な教訓ですが、著作に書かれたのは、昭和8年の寺田寅彦の「津波と人間」が初めのようなようです。
- (2) 事故の可能性（リスク）の理解は、その分野の専門家の方が確かとは限らない。全くの素人の“心配”の方が正しいことも多い。コンクリートと鋼材や、鋼材同士の接合に使用された化学接着剤（のり）への危惧の感覚は、生活体験に根ざした庶民感覚の方が適切でした。
- (3) それぞれの特定分野の専門家は、他の分野や海外の他の国の災害や事故の報に接しても、そこから教訓をえず、自分の分野は大丈夫と胸を張る。カリフォルニアでの地震による高速道路の落橋に際し、十分な情報のないうちから、日本では耐震設計をしているのであんな事にはならないと主張し、阪神淡路大震災で被災してしまった例あり。
- (4) 災害や事故の予防のための費用はケチるが、それより何倍もする発生した事故や災害への費用の支出は惜しまない。災害復旧費の補正予算は、公共事業反対の政党も含め全会一致で速やかに国会で成立する。医術の世界でも、予防のための少ない費用が、膨大な治療費より冷遇されるという。”罹らなかつた病気の治療費を払う人はいない。”と養老孟司先生は言われる。
- (5) ひとたび発生してしまった災害や事故に対し、その拡大を防止し、被害を最小に食い止めるのに尽力した者に、栄誉が与えられる。同じ消防署員でも、建物の地味な防災点検に日夜努力する姿より、実際の火災で活躍する姿の方が尊敬される。
- (6) 防災施設は災害や事故を防止しても防止しなくても、どっちにしろ誉められない。災害や事故を防止すると、もともと不要な施設だったのだらうと揶揄され、完璧に防止できなければ欠陥施設と非難される。